

第 2 回

大切な目を守るために
— 今、知っておきたい目の話 —

ヒトは、日常生活において、大よそ8割以上の情報を視覚から得ていると云われています。2024年6月に日本眼科啓発会議が日本人の目の健康に対する意識、関心度、目の病気の知識度、不安などを把握するために実施した「目の健康に関する意識調査（2024）」によると、「現在、健康面で不自由を感じていること」は、歯や足腰などと比べて「目（視覚）」が最も高いことがわかりました。それにもかかわらず、目（視覚）に対して、「普段から健康維持に努めている」は2割と低く、歯や足腰と比べて、意識と行動のギャップが最も大きいこともわかりました。本セミナーでは、ドライアイ、白内障、緑内障など、どなたにも起きる可能性がある代表的な目の病気の症状と診断・治療について解説します。早期に発見できれば、適切な予防・治療が可能となり、進行を遅らせること、症状を緩和させることが期待できます。目の健康を振り返り、これからも快適な見え方を維持することで、目の健康寿命を延ばしましょう。

日時

2026年 6月12日(金)
9：30－11：00（質疑応答含む）

会場

本社



講師
慶應義塾大学病院 眼科教授
根岸 一乃 先生

<略歴>

1988年 慶應義塾大学医学部卒業・同眼科学教室入局
1995年 国立埼玉病院 眼科医長
1998年 東京電力病院 眼科科長
2001年 慶應義塾大学医学部眼科学教室 専任講師
2007年 慶應義塾大学医学部眼科学教室 准教授
2017年 慶應義塾大学医学部眼科学教室 教授
2021年 慶應義塾大学医学部眼科学教室 教授 教室主任
2025年 慶應義塾大学 副医学部長

現在に至る

メディカルトリビア — ちょっとタメになる話 —



天才たちの見るチカラ・ミエルチカラ
— 世界と世紀を超えた先にあるもの —

視力矯正のための本格的なコンタクトレンズは、1888年ごろスイスで発明されたが、その原理を発見したのは、万能の天才「レオナルド・ダ・ヴィンチ」。水で満たしたガラス容器を通じて見た景色が、違って見えた現象から気づいたという。日本では、1951年にメニコン創業者、田中恭一によって開発された。当時、眼鏡屋で働いていた20歳の恭一は、アメリカで開発中のコンタクトレンズについて聞き及び、敗戦後間もない文献さえ入手する術もない時代に、大和魂に火をつけ、プラスチックなどの材料を闇市で探し当て、直感と経験で以て僅か数か月ほどで開発した。ただし、漸くプロトタイプを完成させ、意気込んで兄弟知人らに頼みこんでも誰からも協力を得られなかった。意を決し、自身を人体実験に試したところ不思議と痛みもなく、そしてよく見えたという。現代まで継承される「ジャパンプランド」の楚、「職人氣質」を垣間見るエピソード。

（文責：株式会社Arxs）